

氏名	石川 義宗
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第1号
学位授与日	平成19年3月31日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	<b>シェーカー教徒の家具、および建築デザインの研究</b> <b>— 簡素の概念と造形における形成と発展 —</b>
審査委員	主査 武蔵野美術大学教授 小林昭世 副査 武蔵野美術大学教授 柏木 博 副査 武蔵野美術大学教授 寺原芳彦 副査 日本大学大学院教授 栄久庵祥二

## 内 容 の 要 旨

### シェーカー教徒

シェーカー教徒(以下、シェーカー)はプロテスタントの一派である。1774年にイギリスから渡米した9人のシェーカーを初めとしており、アン・リーという女性が最初の指導者である。彼らは男女の接触を禁じていたため、結婚をせず、出産による教徒の増加は見込めなかった。それにもかかわらず、1830年代には約6000人の教徒を得ることになり、19カ所に共同体を建設した。しかし、それほど多かった教徒も19世紀後半から急速に減少し、20世紀中にはほぼ消滅した。集会で震えるようなダンスをすることから、シェーカーと呼ばれるようになった。

### シェーカーの家具

シェーカーの家具は19ヶ所に及ぶ共同体建設の一環として作られたものである。例えば、マサチューセッツ州ハンコックには、3番目に作られた初期の共同体が現存している。建築には、腰折れ屋根、シンメトリーのファサード、上げ下げ窓、40度くらいの緩やかな屋根などが見られ、19世紀のニューイングランドに典型的なジョージアン様式である。しかし、室内については独特の特徴が見られる。例えば、寄宿舎の食堂では、天井や壁に装飾がない。また、家具も簡素なので、空間は全体的にすっきりとした印象である。壁にはペグレールと呼ばれる水平の板が取り付けられている。ペグレールはペグを固定するもので、元々は葉草やかごなどを掛けていた。しかし、シェーカーは椅子をペグに引っ掛けるといった独自の習慣を生み出した。掛けるときには椅子を逆さにし、貫をペグに引っ掛ける。また、デザインは統一されており、座面の高さを変えることによって子供から大人ま

で使われる。木工は男性が担当したが、座面は女性が作った。そのため、全体は簡素だが、座面には繊細な編み模様が見られるのである。

## 目的

シェーカーの極度な簡素さは当時のアメリカの家具のなかでも独自の造形であった。シェーカーは家具や建築の造形に強い関心を持っており、家具は単に共同体の活動に関係しているだけでなく、彼らの信仰とも関係し、固有の生活文化を作り上げていた。それゆえ、シェーカーの家具は美術史やデザイン史に限らず、社会学などでも注目されてきた。それらにおいて、シェーカーの信仰と家具の造形の関係性が幾度か指摘されてきたものの、必ずしも十分な注意が払われてきたとは言えない。その点について、彼らの歴史を通じた体系的な研究が求められるところである。また、シェーカーの家具は19世紀の工芸品にも関わらず、20世紀の現代デザイン理論によって再評価されたという経緯がある。それゆえ、19世紀の歴史研究に終始すると、その重要性を見過ごすことにもなる。以上の点を考慮し、本研究は以下のような3つの目的を定めた。

- (1) 簡素の概念というシェーカーのデザインに独自の考え方の特質を明らかにすること。
- (2) 簡素を志向するシェーカーのデザインの造形の特徴について、形成、発展、多様化という過程として明らかにし、その造形を変化させた諸要因について考察すること。
- (3) 簡素の概念とそれに基づくシェーカー教徒のデザインの研究を通して、シェーカー・デザイン研究の今日的な意義について再検討すること。

## 研究の方法と構成

以上の目的のために、本研究は初期の研究者であるエドワード・デミング・アンドリュースや最近の研究者であるティモシー・D・リーマンの研究をはじめとして既往の研究を踏まえ、歌、詩、著書といったシェーカーの文書の解釈、3次元コンピューター・グラフィックスの制作などを含めて研究を行った。また、本研究は共同体の変容を3つに分け、(1) 共同体の建設が始まり、制度や行動規範が創成した時期、(2) 共同体の規模が最大となり、制度や行動規範が完成した時期、(3) 共同体の規模が縮小し、世俗化した時期に注目した。また、それらに対応するものとして、(1) 伝統の影響による造形の形成、(2) 典型的の完成という造形の発展、(3) 交易の活性化や生産技術の進歩による造形の多様化という時代区分を行った。この区分により、目的に対する体系的な研究が行われた。

前記(1)、(2)、(3)は、後記の第I部、第II部、第III部として研究された。

## 第I部 創成と限界 1776 - 1820

シェーカーの規範が明文化される以前の時期が注目される。本研究は、当時の造形の形成において、管区という制度を超えて往来する職人の活動に注目し、その影響を明らかにしている。そのために、既往の研究の端々から職人と物資の管区を超えた移動を追跡した。

また、本研究は最初の指導者であるアン・リーの言葉を手掛かりとし、簡素の概念の発生を探った。そして、彼女の言葉が生活の細部への注意に際立っていることを指摘した。さらに、当時、共同体の周辺にあったオランダ様式、ウィンザーチェア、バニスターバック・チェアといったニューイングランドの伝統様式が初期の椅子の造形に影響したことを、各様式の細部とシェーカーの椅子の細部を比較することで検証した。

## 第Ⅱ部 理想の実現 1821 - 1860

本研究はシェーカーの生活規範を明文化した『Millennial Laws』と『A Summary View of the Millennial Church』等に注目し、シェーカー・デザインに最も特徴的な簡素の概念を考察した。簡素の概念が、類似する造形の概念(「plainness」「without ostentation」「pure」「wholly unmixed」)と言葉の使用において交換されること、さらにシェーカーの戒律と結びつく12の概念(「faith」「hope」「honesty」「innocence」など)が簡素の概念と同様の記述方法によって書かれていることを明らかにした。例えば、「簡素」は、「考え」、「言葉」、「仕事」という3項の関係によって記述された。しかし、これは簡素以外の概念が「考え」、「言葉」、「仕事」、あるいは「心」、「言葉」、「行ない」という3項の関係によって記述されるのと同様であり、簡素の概念を含めた12の概念は互いに交差するように理解される。また、その3項の間には、精神的な活動としての「考え」、「考え」の表れとしての「言葉」、「言葉」の結果としての身体的な「行い」という関係が読み取れる。この点から、簡素の概念は単に造形に関するものではなく、12の概念と同様の関係によって記述される概念であることが明らかとなった。さらに、本研究は「軽量化」の観点から「簡素化」を考察した。シェーカーの椅子は当初から簡素化されたが、やがて軽量化されるようになった。本研究は、1800年から1880年にいたる椅子の軽量化の過程を整理するとともに、補強材や継ぎ手に注目し、それらの点からシェーカーによる実験的な試みや彼らのデザインへの関心を指摘した。

## 第Ⅲ部 世俗化と多様化 1861 - 1898

本研究は外部社会においてシェーカーのデザインへの関心が高まったこと、南北戦争以後の共同体の縮小のなかで交易が活性化したこと、また、シェーカーがヴィクトリアン様式等の流行に関心を持ったことに注目した。それらにより、シェーカーのデザインが典型から逸脱し、多様な造形が見られるようになったことを指摘した。さらに、立て削り機、旋盤、形削り盤、中ぐり盤といった木工機械の導入によって造形の細部が変化したことが注目されている。特に、木工機械の導入によって単に装飾が減少したわけではなく、一時的に装飾が発生した事例を提示し、既往の研究を反証した。

終章において、本研究は20世紀に開催されたシェーカーのデザインに関する展覧会が整理し、それらが何に注目し、何に重要性を見出したか整理する。また、ヴィクター・パ

パネックの「機能複合体」、そして、マックス・ビルの「美的機能」の理論の比較を通し、20世紀のデザイン理論とシェーカーの教説を相対的に研究する。さらに、本論の全体を通して、シェーカーのデザインの今日的な意義が提言される。

## 資料

本研究は資料として年表を制作した。年表は二種類ある。一つは共同体の活動と外部社会の活動を整理したものであり、もう一つは共同体別のものである。既往の研究において、外部社会と共同体の関係が注目されるのは、主に共同体が衰退した19世紀後半である。しかし、本資料はシェーカーの歴史全体を通して、外部社会と共同体の活動を整理した。また、既往の研究では、各共同体への研究は見られるものの、共同体の横断的な研究がほとんど見られない。そこで、本研究は東海岸と内陸それぞれの中心的な共同体5つ、およびそれ以外の共同体の活動を整理した。

本研究は資料として3次元CGによるアーカイブを制作した。本研究はジョン・キャセイによる採寸図面をもとに、家具をCGで再現した。これにより、対象を傷つけることなく様々な角度から観察したり、部材の断面を解析したりすることが可能となり、写真撮影等では困難な研究も期待できる。修復や保存の見地からも再現性の高いCGの制作は重要であろう。また、デジタル化によってインターネットにおける情報提供が可能になるので、様々な研究者、学生、デザイナーが活用可能な資料提供が可能である。その点では美術分野におけるデジタル技術の応用に新たな活路を拓くものといえる。

## 第I部 創成と限界 1776 - 1820

### ビショップリックによる管轄

ビショップリックは日本語で「司教」など訳されるが、周知のとおり、キリスト教における聖職者の階級の一つである。プロテスタントであるシェーカーもこのような階級を持つ社会を作っていた。上から、キリスト、最初の指導者であるアン・リー、マウント・レバノン共同体のミニストリー、そして、ビショップリック・ミニストリーとなっており、それは上から4番目の階級である。シェーカーは最終的に19カ所に共同体を建設したが、共同体相互の横断的な研究は少ない。本研究はそのような現状から3つの研究に注目した。それらは研究対象が家具であったり、建築であったりしているが、共同体相互のデザインを調べた研究として重要である。それらの研究は、ノルドホッフ、シファー、リーマンの3者によるものである。

ノルドホッフとシファーの研究はともに複数の共同体において建築のデザインが類似していることを指摘したものである。しかし、シファーは共同体によってデザインがわずかに異なる点に着目しており、この点にノルドホッフとの相違が見られる。また、シファーはマウント・レバノン共同体のデザインが他の共同体に転用されたこと、モーゼス・ジョンソンというシェーカーが複数の共同体に派遣されたことを指摘した。特定の共同体や人

物に焦点を当て、類似の具体的な証拠を示したシファーのような論述は、ノルドホッフの研究には見当たらないものである。

続いて、シファーとリーマンの研究を比較した。シファーはジョンソンというシェーカーが複数の共同体に派遣されたことを指摘した。彼が派遣された共同体はウォーターヴリッドやハンコックなど 10 カ所に及ぶものである。一方、リーマンは、複数の共同体に見られる家具のデザインが、同じビショップリックによって管区される共同体相互では類似することを指摘した。彼によれば、一人のビショップリックが 2 カ所から 3 カ所の共同体を管轄した。このような連帯は主にニューイングランドの共同体に形成され、ケンタッキー州などの内陸の共同体には見られないものであった。そして、本研究はこの両者の指摘には一つの問題があることに気付いた。ジョンソンが派遣された共同体をビショップリックの管区別に分類すると、ジョンソンは 5 つもの管区に派遣されたことが分かった。同一人物がデザインしたのであれば、管区を越えた類似性が見られるのは当然である。つまり、ビショップリックによる管区ごとの類似性があったというリーマンの指摘は、この場合成立しない。

以上の点を踏まえ、本研究はジョンソンのように共同体相互を移動する職人が他にもいたのではないかと考えた。そこで、著書の端々に散見される教徒や物資の移動をまとめたところ、主にウォーターヴリットとマウント・レバノンから教徒が出発していたことが分かった。また、このような活動は 1835 年以降にも見られ、初期の共同体の活動に限ったことではないことが伺えた。さらに、活動を地図に写すと、特に東海岸と内陸を結ぶ比較的長距離の経路が確立されていたことが分かった。ビショップリックが管区ごとに共同体を連携させたことは確かだが、その管区を越えた活動があったことも確かである。そして、実際には、このような職人の活動を通じてデザインが伝わり、家具が作られたわけである。したがって、初期のシェーカーのデザインに共同体の形成が影響したとはいえない。むしろ、職人の往来は共同体相互のデザインを統一させたり、技術的水準を向上させたりするうえで有意義なものだったと考えられ、このような共同体を越えた人材支援の流れを作っていたことに、シェーカーの家具を作るための基盤が形成されたといえる。

### アンの言葉の影響

指導者であるアンの言葉から、デザインに関する概念を読み取りたい。アンは字を書くことも読むこともできない女性であった。したがって、自分の考えを文書として書き残したわけではない。彼女の言葉は後のシェーカーによって言い伝えられたものであり、死去から 32 年後の 1816 年に刊行された著書においてようやく明文化され、残された。そのため、アンの言葉には断片的なものが多い。アンの言葉については、初期の研究者であるアンドリュースが逸早く注目した。彼はアンの言葉には清潔や秩序への関心が見られることを指摘した。例えば、彼女の言葉には、「clean」や「neat」といった言葉が繰り返され、清潔や整理が執拗に求められている。しかし、必ずしも清潔や整頓を求めるものばかりで

はない。ある住宅を訪問した際の言葉は、銀のスプーンを戒めるという点では儉約の言葉でもあり、テーブルを掃除するように求めるという点では清潔の言葉であり、貧しい人への施しを勧めるという点では慈悲の言葉でもある。アンの言葉には清潔に関するものだけでなく、労働や慈悲を奨励するものも見られるが、彼女の言葉は総じて生活の細部に対する注意力に際立っている。それは 19 カ所に共同体を建設し、6000 人の教徒を得たシェーカーの歴史に比べると、余りに素朴なものだといえる。その原因として考えられることは、最初の共同体が建設される前にアンが死去しているという点である。最初の共同体が建設された時は彼女の死去から 3 年後である。それゆえ、アンの言葉には、衣服のデザインへの関心がわずかに見られるくらいである。この点において、アンの言葉は生活の細部への眼差しが顕著でありながら、共同体全体に関する計画的、もしくは構想的な眼差しが欠如していることは確かである。しかし、それがシェーカーの最初の規範であった。そこで、本研究はアンの言葉がどのようにシェーカーの規範に影響したのかを調べるため、以下の言葉に注目した。その言葉はデザインについて語ったものとは言えないが、外部社会の住宅に訪問した際に室内の家具や日用品について述べた言葉である。元々、1816 年に刊行されたシェーカーの著書には、このアンの言葉は 1783 年のものであることが記されている。それはアンの死去の前年にあたる。アンはピーターシャムという町を訪問し、ある一家に滞在したようである。アンが高級な家具や銀のスプーンを戒めていることは、儉約とともに、簡素なものを好むシェーカーの信仰を読みとれる部分である。この部分については、1795 年に刊行された最初の教説の書、『The First Covenant』にも同様の記述が見られる。ここでは、「World's goods」として物品を集めることが戒められた。また、19 世紀後半のシェーカーの言葉にも同様の記述が認められる。それはフレデリック・W・エヴァンスというシェーカーがニューヨークの高級住宅に滞在したときのものである。彼はカーペットに注目し、その上にほこりが積もっており、掃かれることもなかったと述べた。カーペットは当時、中流階級以上で普及した高級品だった。したがって、じゅうたんへの嫌悪は贅沢に対する嫌悪として読み取ることができる。また、彼はじゅうたんに積もったほこりを批判し、この世の人々はシェーカーの考えに適うほど清潔ではないと述べた。

エヴァンスの言葉とアンの言葉を比較すると、類似が見られる。この類似はエヴァンスがアンの言葉を借用したものだと考えることができるが、シェーカーが常に儉約や清潔を重視した点から推察して、それはエヴァンスに限ったものではなく、シェーカーの一般的な信仰だったといえる。先述したように、アンの言葉にはデザインに関するものが見られない。しかし、アンやエヴァンスの言葉にはインテリアについて儉約や清潔を求める言葉がともに見られ、実質上、インテリア・デザインの一つの概念として働いていることが伺えるのである。この点により、儉約や清潔といったアンの信仰がシェーカーの家具の中心的な概念、すなわち簡素の概念の萌芽であったと推察される。

## 伝統様式の影響

1776年、シェーカーはニスクーナと呼ばれるハドソン川渓谷の土地に最初の農園を拓き、1786年、最初の共同体を建設した。その後、建設された共同体は8年間で11カ所に及んだ。最初の共同体が建設される前に、小規模ながら幾つかの建築が建てられた。例えば、1778年には最初の寄宿舍が建てられ、1784年には二軒目の寄宿舍が建てられ、1785年には最初のミーティング・ハウスが建てられた。この時期のデザインの変容について、幾人かの研究者が植民地時代の家具の影響に注目してきた。例えば、ウィンザーチェアやバニスターバック・チェア、オランダ様式の影響が指摘されてきた。それらの家具はこのようなものである。左からバニスターバック・チェア、ウィンザーチェア、オランダ様式の椅子である。すなわち、特定の家具の影響を指摘することはできず、ニューイングランド地方の地方部の幾つかのスタイルが複合的に影響したという指摘が多く見られるのである。しかし、それを単に複合されたものとして考えるのではなく、複数のスタイルをどのように取り込んだのかつづさに観察すれば、初期のデザインに関するシェーカーの考えを知ることができると、本研究は考えた。

はじめに、シェーカーの椅子と植民地時代の家具の影響関係を整理した。伝統的な椅子に対し、その影響を受けたシェーカーの椅子を整理すると、オランダ様式の影響を受けたのは主にシェーカーのスラットバック・チェアとアームチェアであり、ウィンザーチェアの影響を受けた椅子は、主にベンチや回転椅子であり、バニスターバック・チェアの影響は、シェーカーのバニスターバック・チェアやアームチェアに見られる。ここから分かることは、椅子の種類に応じて模範とすべき家具を選んでいったということである。また、3番目は植民地時代の家具とシェーカーの家具の共通点である。例えば、オランダ様式とシェーカーのスラットバック・チェアとの共通点は、挽きものの構造、フィニアル、薄い3枚くらいの背板、藤張りの座面に見られる。また、いずれも挽きものを多く使用するという点で共通している。ここから分かったことは、複合的な影響といっても、実際には挽きものを多用する椅子を選んでいったという点である。挽きものは旋盤を使えば制作することができるので、それらの制作工程や技術はほぼ同じだったはずである。この3種類の植民地時代の家具は偶然に選ばれたわけではなく、限られた技術で数種類の椅子を制作することを可能にするわけだ。シェーカーはそのような概念のもとに自らの椅子をデザインしたと考えられる。

さらに、デザインの各部分について調べるため、植民地時代とシェーカーの共通点に焦点を当てた。オランダ様式からシェーカーのスラットバック・チェアが作られる過渡期の変化を留めた椅子が現存している。本研究はこの椅子からシェーカーの椅子に生じた初期の変容を読み取った。それを整理すると、「簡素化されたオランダ様式の部分」、「オランダ様式からシェーカーの椅子に伝わった部分」、「シェーカーにより新たに作られた部分」として部分を分類することができた。

「簡素化されたオランダ様式の部分」から分かったことは、初期の簡素化はバックポス

トの溝をなくし、脚とバックポスト、貫の太さを細くすることだったという点である。また、「オランダ様式からシェーカーの椅子に伝わった部分」から分かったことは、シェーカーの椅子はオランダ様式の特徴を多く踏襲していたという点である。そして、「シェーカーにより新たに作られた部分」から分かったことは、シェーカーが新たに作った部分は、細くされた脚とバックポストと貫であり、座面の編み模様だったという点である。全体的に見て、初期のシェーカーの椅子はオランダ様式の影響を多く受けており、新しいデザインを創造するというほどの変化は見られない。限られた技術で数種類の椅子を制作したことを先述したが、自分たちで作ることができる範囲で生活の必要を満たすという実用性が、初期のデザインの特徴だったといえる。

## 第Ⅱ部 理想の実現 1821 - 1860

当時は共同体が最も繁栄した時期である。例えば、量産体制が整い、1821年には一人で年間100脚の椅子を作ることができた。また、1828年には共同体は19カ所になり、教徒数は6000人に達し、人口が最も多くなった。1839年には、マウント・レバノン共同体が125棟の建築と2200エーカーの土地を所有した。一方で、代表的な著作が刊行された。例えば、1821年には『Millennial Laws』が刊行し、幾つかのデザインの指示が明文化された。また、1823年には『A Summary View of the Millennial Church』が刊行され、シェーカーの信仰が12の原理に体系化された。1844年には、清潔のしつけに関する教科書が刊行され、1859年には『Shaker Compendium』が刊行され、シェーカーの歴史が明文化されたのである。

### 簡素の概念

概念について、多くの研究が彼らの文書に注目してきた。なかでも頻繁に引用されたのが『Millennial Laws』と、その2年後に刊行された『A Summary View of the Millennial Church』(以下、『Summary』)である。『Millennial Laws』は簡条書きで書かれ文書で、内容は具体的である。このなかに装飾を抑制し、デザインを統一するための指示が書かれている。例えば、3章9節は玉縁やくり形、コーニスのような建築の装飾を禁止している。実際、ハンコックの建築にはそれが見られない。しかし一方で、『Millennial Laws』が施行されても、多様なデザインが作られたことも事実である。その良い例がこの円形の納屋である。これは『Millennial Laws』から5年後に作られた。放射線状に梁が組まれ、不完全ながらフラット・ルーフを実現している。また、機能的には、1階の出入り口から牛が入り、2階から落とされた干し草を食べるようになっているが、2階から干し草の減り具合を一望でき、かつ、360度どの方向からでも干し草を落とすことができるため、少ない人手でも作業ができたのである。このような建築が『Millennial Laws』の5年後に作られていた。このことから分かるように、『Millennial Laws』が施行されても、やみくもにデザインが抑制されたわけではなく、むしろ豊かな創造性が発揮されたことは、興味深い

ことである。

一方、『Summary』は『Millennial Laws』のような具体的な指示ではないが、シェーカーの思想を12の原理として体系化したものである。同著の第1章『The twelve Foundations of the law of Christ』には『twelve Foundations』、すなわち「12の礎」として「真実」「希望」「正直」といった教説が記されている。「簡素」の教説はその6番目に記された。この記述に逸早く注目した研究者がアンドリュースである。彼は「簡素」の教説に記された、思想、言葉、製品は単純で簡素であり、万物に渡って自然に単純に至るという記述に注目し、簡素への関心がシェーカーの原理であることを指摘した。しかし、「簡素」の教説の全文において、実際に簡素について語られた記述は一部分に過ぎない。本研究はこの点に注目し、文書全体を精査したところ、「簡素」の教説は他の教義と共通の記述を含んでいることが分かった。例えば、簡素が会話と振る舞いの中に現れる、という最初の記述は「謙虚」の教義にも記されている。特定の記述が転用されたことは一種の言語習慣と考えられるが、それはシェーカーの信仰と深く結びついている。その続きでは、「virtue」、すなわち美德という共通項に対して、それが魂の中に存在すること、また、その美德が特定の作用によって生じることが記されているが、それは「簡素」以外の教義にも述べられたことであった。「簡素」の教説は「謙虚」や「感謝」、「潔白」といった他の教説と同様の語句と記述によって共通に語られており、各教説は独立した定義でありながら、内容は横断的に結びついている。つまり、「簡素」の教義は幾つもの定義を交差させ、転用をくり返し、特定の語句によって構成されたものである。シェーカーは文書を書くとき、何を記すかではなく、どのように記すか、ということに大きな関心を持っていたと考えられる。この記述法から推察できることとして、簡素の教義は様々な概念の集合であり、他の様々な教義と関係づけて理解されていたことが伺えるのである。簡素化というデザインの手法が、多様な倫理と結びついているわけである。この概念により、簡素な家具は多様な信仰上の意義を有しており、生活の規範を形成するうえで重要な働きを担ったことが分かった。

#### 清潔の概念

第I部において、本研究はアンの言葉に注目し、「儉約」と「清潔」の信仰が簡素の概念の萌芽であることを指摘したが、それらの体系的な記述は第II部の時期に執筆された『A Juvenile Guide』の刊行を待たねばならなかった。同著は子供をしつけるための教科書だが、清潔に関する教説が最も詳細に記された著書である。本研究は、簡素の概念の場合と同様に、『A Juvenile Guide』の記述法から清潔の概念について読み取れることがあるのではないかと考えた。例えば、服装に関する清潔の教説では、始めに「neat and clean」としてきちんとすることや清潔が指示されている。「clean」は衛生上の清潔を表しているのに対し、「neat」は整理整頓による清潔を表しているように、必ずしも同じ状態を指しているわけではない。著書のなかでそれらの区別は曖昧である。この点に留意して、それらの語句を整理すると、一つの関係を読み取ることができた。この記述の最後に「dirty」として、

汚れたものへの嫌悪が記されているが、9章全体を見回すと、このような清潔に対する不潔という対立的な語り方が多く見られた。そこで、清潔に関する語句と不潔に関する語句を分類すると、一定の対立関係が読み取れた。「clean」と「neat」の関係は曖昧だが、その原因はそれらが一對のものとして考えられているためであった。そして、それらに対応する一對の反意として「dirty」と「slovenly」が記されているわけである。また、別の箇所には、清潔がキリスト教的な心の問題として語られると、労働や慈悲や愛によって示されるという記述がある。清潔を他の3つの信仰と結びつけているが、このような複合性は簡素の概念にも見られたものだった。簡素の概念に比べれば、清潔の信仰は決して大きな進歩を遂げていない。このことは、簡素の概念が特に進歩したことを示すとともに、清潔の信仰の構造が簡素の概念の萌芽であることを伺わせるものである。

### 平等の概念

シェーカーの共同体では男女の接触が禁じられていた。本研究はそれを「性別のセパレイション」として注目した。それが寄宿舎の設計に影響を与えたことがしばしば指摘されてきた。具体的には、男女の接触を禁じるためにドアを男女別々に設けるという建築上の特徴として、それは現れる。本研究は、男女の接触の禁止と寄宿舎のデザインの関係を指摘したのもとして、異なった二つの研究に注目した。アンドリュースは、性別は平等だが個々のものであるというシェーカーの考えを、部屋の配置が表していると指摘した。そして、性別のセパレイションによるデザインの変化として、建築の出入口が2つあったこと、ミーティング・ルームではベンチや椅子が二対で、向かい合わせに置かれていたことを、「Dual system」（二元的方式）として注目したのである。それは各階の部屋の大きさや場所をつぶさに記録したものである。一方、ハイデンは、ランソンというシェーカーが男女の身体の間を「altar」（祭壇）と呼んでいたことに注目した。この架空の祭壇によって、男女がすれ違う寄宿舎の廊下では、ミーティング・ハウスでの宗教儀式と同じ空間的体験が想像されたというのが、その指摘である。

両者の研究を比較すると、アンドリュースの研究は基本的に部屋の大きさや構成に注目したものであり、部屋を主体としたものだといえる。一方、ハイデンの研究は男女が左右に分かれて行動することから、寄宿舎の廊下に注目したものである。また、アンドリュースは部屋に注目したので、そのシンメトリーは部屋が左右均等に配置されるという空間構成に依拠している。一方、ハイデンは廊下ですれ違う男女の行動に注目しており、そのシンメトリーは廊下を舞台とした身体の行動に依拠している。また、アンドリュースは部屋の配置が男女の平等の表れであることを指摘したが、ハイデンは身体の形式に見られるシンメトリーの意味を宗教儀式の追体験として捉えた。

アンドリュースが指摘したように、性別のセパレイションには平等の概念が強く関わっている。共同体の仕事では、男性は木工や農業、牧畜に従事し、女性は家事労働に従事し、異なっているが、その一方で、部屋の構成によって男女に等しい生活空間が用意されたの

である。また、ハイデンによれば、性別のセパレーションは宗教儀式のイメージを寄宿舍のなかに再現するものでもあった。それゆえ、寄宿舍はミーティング・ハウスと同等の建築的重要性が生じていたと考えられる。すなわち、性別のセパレーションは単に男女の接触を禁じる制度ではなく、平等の概念を造形化するための制度として働いていたともいえるのである。性別のセパレーションを通じて、平等の概念は寄宿舍におけるシンメトリーという場の形式や、宗教儀式におけるシンメトリーという行動の形式として造形化されたのである。

### デザインの典型と行き過ぎ

第Ⅱ部の時期において、シェーカーの家具の典型は完成した。例えば、椅子は伝統的な植民地時代の家具を原型として簡素化され、さらに軽量化された。これにより、椅子を壁に掛けるという独自の習慣が成立したのである。また、キャビネットは表面の彫刻が抑制され、さらにビルト・インによって極度に平面化された。しかし、典型が完成しても、幾つかの点で不安定さや行き過ぎが見られたことも確かである。本研究はその点に注目し、スラットバック・チェアーに着目した。

椅子の軽量化は椅子を壁に掛ける習慣を作る上で重要なものだった。軽量化については、リーマンが1820年頃のマウント・レバノンから始まったことを指摘したが、1840年以降、椅子は全体的に1820年のような細さが維持された。しかし、よく見ると、全ての椅子の部材が同様の細さではない。例えば、ここで2脚の椅子に注目してみると、一方の椅子は同時代に作られたもう一方の椅子に比べて明らかに部材が太くなっている。この点に注意して1840年以降の椅子を見渡すと、椅子の部材の太さに相当の差があることが分かった。これはリーマンの2冊の著書のみを整理した結果であり、より多くの椅子に目を向ければ、同様の事例がさらに散見されると考えられる。そして、この結果は軽量化の度合いに差があったことを示している。1800年以降、全ての椅子が簡素化されたが、軽量化については必ずしもそうではなく、簡素化より約20年後に始まり、かつ安定的に実現していたわけではなかったのである。

軽量化に見られる不安定さは、木工機械の性能や職人の技術的水準の問題があると考えられるが、椅子以外の家具には、また別の変化も見られた。例えば、スタンドの変化に注目してみると、マウント・レバノン共同体で18世紀末期に制作されたものは、支柱の継手部分が太くなっており、十分な強度を備えているが、棒のような足がそのまま組まれている。家具の典型に比べれば、ややプリミティブなものである。一方、19世紀初めに作られたスタンドに注目すると、それは支柱が上から下へ僅かに太くなりながら、円弧を描く脚がそれに組まれている。このデザインを実現したものが「あり継ぎ」という継手である。先ほどのスタンドに比べれば、これは明らかな進歩だが、支柱の底部には見えないように金属の板が付いている。この補強がなければ十分な強度が得られなかったことは、デザインの進歩に対する構造的な欠陥だといえる。また、19世紀前半に制作されたと思われる

スタンドに注目すると、脚があり継ぎによって支柱に組まれている。支柱は最も細い部分で直径約3センチ、もっとも太い部分で直径8センチある。すなわち、2倍以上に太さが変化しており、強度が十分に考慮されたことが伺える。また、見た目にも、上から次第に太くなる支柱のボリュームを次第に細くなる脚が受けることでバランスをとり、洗練された印象に仕上げている。金属の補強が入ったスタンドについてだが、構造的な補強は一時的に見られるものである。しかし、同様のことは他の家具にも見られた。例えば、19世紀の初頭に作られたスツールには、鉄製の細い筋交いで補強されたものがある。それはベンチを軽量化しながら、十分な強度を得るための工夫だと考えられるが、一方で、スツールを軽快に見せるという外観を意図していると考えられる。さらに、19世紀前半には、棚板だけでできた棚が制作された。それはペグレールに設置されているので、まるで椅子のような軽量さがあるが、実際には棚はペグに引掛けられているのではなく、レールに止め金で打たれている。また、棚板は側板に大入れ継ぎで組まれているが、実際には細い金属の棒が全体の構造を維持している。この棚は簡素化され、軽量な印象のデザインだが、設置状況や構造に必然性が乏しく、シェーカーの家具らしさを強調し過ぎているといえる。

全体的に見れば、本研究が注目した不安定さや行き過ぎは限られた事例であり、些細なものだといえる。しかし、たとえ些細な変化であったとしても、それは新しいデザインを作り出そうとする実験的な試みである。そのように、デザインへの関心が高まったことについて、背景として考えられることが、先述した簡素の概念の働きである。すなわち、デザインへの関心が高まったことにより、時として生活に求められる構造や機能性が見過されたのである。

### 第三部 世俗化と多様化 1861 - 1898

共同体の規範が衰退したことについて、外部社会の変容がその要因として考えられてきた。アンドリュースは南北戦争の時期に注目し、典型的なシェーカーの文化が次第に崩壊し始めたことを指摘した。彼によれば、入信が減少する一方で、農園を管理したり市場で工芸品を販売したりするために、外部社会の機械の導入や人の援助が増大し、シェーカーの規範が衰退したというのである。彼は共同体衰退の直接的要因として、交易の活性化と外部社会からの人の流入を指摘したのである。特に、交易の活性化は、共同体の外部社会における活動を積極的に促し、それによって共同体が世俗化し始めたのである。

#### 外部社会との交易

外部社会との交易はシェーカーの歴史を通じて見られることである。しかし、1870年以降の交易は明らかにそれまでのものと異なり、大規模かつ旺盛なものだった。この時期の交易を象徴することとして、しばしば指摘されるのが、ドレード・マークの使用やカタログの刊行(1874)、フィラデルフィア万国博覧会(1876)への出品である。また、外部社会ではシェーカーの家具への関心が高まり、イミテーションが出回るようになっていた。

それはシーモアという会社が製作したものである。イミテーションは、シェーカーの椅子とは似ても似つかないものだが、ある話によってシェーカーの椅子として知られるところとなった。その話とは、シェーカーが椅子をフィラデルフィア万博に出品したとき、トーネット社の曲げ木の椅子を知り、この椅子を制作したというものである。この話は誤解なのだが、部分的に事実を含んでいることは確かである。したがって、この話は単なる作り話というより、シェーカーの家具に対する外部社会の関心の高まりを示すものでもあり、その点において重要性があると本研究は考えた。このような状況における活動に注目し、当時の共同体の変容を読み取ろうと思う。

万博のようすを知るため、本研究は当時刊行されたフィラデルフィア万博の公式ガイドブックに注目した。ガイドブックは二巻あり、その大部分が連綿と記された出品目録である。その中からシェーカーの出品目録を探したところ、「376 Wagan, R. M., Mount Lebanon」という項目が見つかった。マウント・レバノンのワガンというシェーカーが代表を務めていたが、彼は椅子の工場を建設した人物である。この項目の説明から、出品された家具を読み取ることができるが、それらは1872年に完成した工場で生産された製品も含まれていたと考えられる。最後には「Genuine Shakers' Chairs」(正真正銘のシェーカーの椅子)という文言が付されているが、それはイミテーションに対する注意を多分に含んだものといえる。

ガイドブックからは、イミテーションの話が作られた背景も推察することができる。シェーカーの家具が登録された部門「MANUFACTURES」には、イミテーションを販売していたシーモア社の名も見られる。同社の項目は「332 Seymour, H. J., Chair Co., Troy, N.Y.」となっている。品目は「Bent chairs」だが、シェーカーの椅子のイミテーションは前年に生産を終えていたため、出品されなかったと考えられる。また、トーネット社の名も見られる。同社の項目は「74 Thonet Brothers, Vienna.」であり、品目は「Furniture of bent wood」である。すなわち、シェーカー、シーモア社、トーネット社は同じ部門に登録され、展示場所はいずれもメイン・ビルディングだった。ガイドブックのメイン・ビルディングの地図を見ると、アメリカの展示場所とオーストリアの展示場所が近いことが伺える。すなわち、展示場所から推察して、シェーカーがトーネット社の曲げ木の椅子を見た可能性は十分考えられ、このような展示の状況によって曲げ木の椅子の話が想像された可能性が考えられる。

トーネットについては、出展目録以外にもその名が見られる。6人で構成された同部門の審査員リストのなかに、フランシス・トーネットの名が記されている。彼はトーネット社の一人で、創業者ミヒャエルの子孫である。シェーカーの椅子が同博覧会で受賞したと先述したが、この受賞にはトーネット自身が関わっていたのである。このような事実を踏まえ、共同体の活動を振り返ってみたい。まず、椅子の工場の建設を指導したワガンは万博への出品を指導した人物だったが、出品目録から工場で生産されたものが多く出品されたようすが読み取れた。また、博覧会の出展目録には「Genuine Shakers' Chairs」の注意

が付けられていたが、1873年、マウント・レバノン<sup>1</sup>はトレードマークの使用とカタログの刊行を開始しており、共同体は自らが作る家具の商品価値を十分に理解し、イミテーションに警戒していたといえる。フィラデルフィア万国博覧会への出品は、共同体が外部社会において活動することによってもたらされたことであり、その点においてこの時期の活動を象徴している。それはシェーカーの家具への関心の高まりに対して、自らの家具を商品化するための周到な計画によるものであった

#### 木工機械の導入

第Ⅲ部の時期におけるデザインの変化として、木工機械の導入に注目し、デザインの変化を明らかにしたいと思う。木工機械がデザインの変化に与えた影響を指摘した近年の研究は、リーマンとパークスによって発表された。彼らは1860年代までには多くの工房で丸のこ、平削り盤、中ぐり盤などが使われていたことに注目し、それが椅子の大量生産や部品の規格化を可能にしたと指摘したが、そのなかでも、旋盤と形削り盤はデザインに変化を与えた機械として指摘された。そのなかでも本研究が注目した指摘は、「アームを支える挽きものが簡素化した」というものである。これは挽きもの<sup>2</sup>の下端の装飾が1870年までは見られたが、1880年以降のものには見られなかったという論述である。すなわち、木工機械の使用によって装飾が消えたことを指摘したわけである。この点について考察するため、本研究はリーマンの数冊の著書から、マウント・レバノンで制作されたアームチェアを整理した。1870年以前の挽きものは徐々に太さが変わるテーパーになっており、1880年以降のようなくびれたデザインは見られなかった。また、挽きものが装飾性を有する事例もなかった。

ただし、挽きものは椅子全体に使用されていたので、本研究はアームを支える部分以外についても装飾性を調べることにした。リーマンが指摘した1860年前後の椅子に注目すると、挽きものの装飾的なデザインが回転椅子の脚に見られた。それは1875年から1900年の間に制作されたもので、アームチェアの制作年とほぼ同時期である。挽きものに装飾性を与えるデザインは、1780年から1810年のスラットバック・チェアにはソーセージ・ターニングと呼ばれるバックポストを等間隔にくびれさせた装飾が見られるが、緻密なものではなく、全体的に部材が太い。リーマンが指摘したような緻密な装飾がアームに現れた時期は、19世紀後半の1860年頃に限られるのである。それは木工機械の導入と同時期である。したがって、リーマンが旋盤によって失われたと指摘した装飾は、実は機械化の過程で一時期に現れた装飾だったと考えられる。

以上の点から言えることは、技術的な要因で簡素化が失われたという点である。デザインが衰退した原因としては、簡素の概念の衰退、外部社会の流行の影響が指摘されてきたが、それらに先行し、1860年には、機械の導入によって当時のデザインはすでに簡素化を維持することが困難になっていたと考えられる。

## 終章

### 現代デザイン理論による見直し

1935年、ウィットニー美術館でシェーカーの家具の展覧会が催された。これは美術館における最初のシェーカー展である。アンドリュースがこの展覧会カタログを執筆した。出品目録からは、家具の大部分が1820年前後に制作されたものであることが伺える。同展覧会はシェーカーの家具の歴史において最も完成された時期のものを多く展示したのである。また、アンドリュースによるイントロダクションでは、シェーカーの言葉が幾つか引用され、それらを機能主義として評価する記述が見られる。このアンドリュースの指摘は後の展覧会等において繰り返された。機能主義に言及したことは、1930年代の建築やデザインの思潮が反映したためだと考えられるが、アメリカの場合、機能を美の問題として考えることは19世紀から続くものであった。その点に先鞭をつけた人物がホレーショ・グリーンウである。彼は美を機能の約束として捉え、それが本質的なものだと記した。アンドリュースが機能主義に言及しつつ、実用性と美に関するシェーカーの記述に注目したことは、グリーンウに見られるようなアメリカの伝統的な美意識でもあることに注意が必要であろう。すなわち、アンドリュースの論述は機能主義という20世紀の理論によってシェーカーの家具を振り返るものであるとともに、シェーカーの家具を通して、自国の伝統が20世紀の理論と同様の重要性に逸早く気づき、それを実現していたことを指摘するものだといえる。このアンドリュースの指摘は後の展覧会等において繰り返された。先駆的に開催された展示、および展覧会をこのように整理すると、シェーカーの家具に機能主義を指摘することは、アメリカからヨーロッパ、そして日本へ伝わったことが分かった。シェーカーの家具は19世紀の工芸品であるにもかかわらず、20世紀のデザイン理論とともに各地に知られることになったわけである。

### シェーカーの教説と現代デザイン理論

しかしながら、1995年、ヴィクター・パパネックは著書『The Green Imperative』（和訳『地球のためのデザイン』）の中で、シェーカーのストーブを事例とし、「美の機能」として機能主義とは異なる美しさを指摘した。論述において、パパネックはその簡素さに「宗教的価値」や「規範」といった目的があることを指摘した。また、注釈において、シェーカーの記述を引用したが、この記述は先述したウィットニー美術館のカタログでアンドリュースが引用したシェーカーの記述と全く同じものである。アンドリュースとパパネックによって引用された一節は、元々、美に関するシェーカーの考えを記したものであった。その原文には、美に関する3つの原理が記されている。それは「規則は美しい」「調和には大なる美がある」「美は有用性に宿る」というものである。すなわち、パパネックは美に関するシェーカーの考えに関心を持ったのである。このような指摘は彼の最初の著書『Design for the Real World』（和訳『生きのびるためのデザイン』）からすでにその片鱗が見られる。同著は『The Green Imperative』より24年前に刊行されたものだが、そこには「美

の機能」の原型ともいえるデザイン理論が記されている。それは彼が「機能複合体」と呼ぶデザインの6つの重要要素の2つ、「連想」と「美学」である。6つの要素の定義と事例は、製品のデザインとともに、社会や人の心理にまで及んでいるが、このような美に関する理論はパパネックに限ったものではない。例えば、パパネックと同じく生活に関する研究を行った人物にマックス・ビルがいる。彼にも独自の美の理論がある。彼は1957年に刊行されたドイツ工作連盟の機関誌に論文を寄せ、「美的機能」という独自のデザイン理論を発表した。これはパパネックの著書より14年前のことである。向井周太郎の分析によれば、ビルのデザイン理論において、機能は実用的使用目的を持つ建築、製品、グラフィックと精神的な使用目的を持つ絵画、彫刻、純粋芸術に大別できる。また、ビルは「<美=形態、<美=機能>」という図式を示し、形態、機能、美が等しいことを指摘しており、美を主体とした等価の関係を明らかにしたものだといえる。

美を巡るビル、パパネック、シェーカーの考えには共通点がある。例えば、ビルが「実用的使用目的」として指摘したものは、パパネックが「方法」「効用」として指摘したものであり、ビルが「精神的な使用目的」として指摘したものは、パパネックが「連想」「美学」として指摘したものである。ビルは「実用的使用目的」、「精神的な使用目的」という明瞭な二元性によって機能を分析したが、パパネックはそれと同様の問題を「方法」と「効用」、「連想」と「美学」に細分化して研究したといえる。彼らのデザイン理論は難解なものではなく、むしろ平易な理論的骨格を持っている。そして、先ほどのシェーカーの記述はその理論的骨格に当てはまるものだったのである。現代デザイン理論のパースペクティブに照らすなら、むしろこの点がシェーカーの教説の重要性だといえる。

#### 今日的意味

本研究はシェーカーの家具を通してデザインの現状について言えることを幾つかまとめた。それは以下のとおりである。

- (1) 簡素は生活の仕方への啓蒙を基盤としている。
- (2) 簡素は思想や言葉、製品などを貫く概念である。
- (3) 簡素は身の回りの物の調和にとって有効である。
- (4) 標準化によってデザインの可能性が抑制されないように注意が必要である。

上記(1)において想起すべきは、共同体が最盛期のときでもシェーカーの関心は自らの生活を律することにあったという点である。簡素な生活とは、どのような問題に対しても生活の基本を見失わないことである。(2)において想起すべきは、簡素は造形に関わるものに限らず、思想や言葉にも見られたという点である。簡素な生活とは、思想、言葉、製品が一つの規範によって貫かれているということである。(3)において想起すべきは、家具や建築、衣服といったものが調和していたことである。簡素は個々の物よりも、調和そのものを重視するものであろう。(4)において想起すべきは、シェーカーは家具や建築のデザインを簡素化しても、円形の納屋や座面の編み模様に見られるように、やみくも

にデザインを抑制したわけではなかったという点である。戒律による標準のなかにも設計の自由があり、それによって豊かな創造性が生じたのである。ユニバーサル・デザインやエコロジカル・デザインのような新しい標準が定着しつつあるとき、このことは重要であろう。

## 結 論

### 結論

本研究はシェーカーが持っていた簡素の概念について、3つの目的を設定した。一つ目の目的は、簡素の概念というシェーカーの考え方の特質を明らかにすることであった。これについて本研究は主にアンの言葉(第Ⅰ部)、簡素に関する概念(第Ⅱ部)を調べることによって明らかにした。

二つ目の目的は、簡素を志向するシェーカーのデザインの造形の特質について、形成、発展、多様化という過程として明らかにし、その造形を変化させた諸要因について考察することであった。これについて本研究は、ビショップリックの管区(第Ⅰ部)、木工機械の導入(第Ⅲ部)、理想像の完成(第Ⅱ部)、デザインへの関心(第Ⅱ部)外部社会との関わり(第Ⅲ部)、流行への関心(第Ⅲ部)を調べることによって明らかにした。

三つ目の目的は、簡素の概念とそれに基づくシェーカーのデザインの研究を通して、既往の研究の今日的な意義について再検討することであった。これについては、シェーカーの家具の展覧会カタログ(終章)、パパネックやビルのデザイン理論とシェーカーのデザインに関する考えとの共通点(終章)、CG 図版(資料2)を通して研究した。

### 今後の課題

本研究の問題は二つある。一つは、先行研究の乏しい研究テーマなので、関連する分野の文献を広く参照するが故に、先行研究と資料の整理が十分になされたとはいえないことである。このことにより、たとえば「規範」や「制度」など宗教と生活様式・社会という異なる複数分野に根ざす分析概念が十分に規定されているとは言い難い。さらに、やや唐突とも思われるほど、参照と引用の範囲を拡げている点については、もう少し説明を加えることが望まれる。

もう一つは、デザインの研究として、シェーカー・デザインと同時代のラスキンやグリーンウの思想について詳述していないことである。また、シェーカー・デザインを近代デザインに位置付けるときに、本研究では機能概念を批判的に拡張し、見直していくパパネックとビルのデザイン思想との比較がなされているが、若干触れているサリヴァンをはじめ、20世紀半ばまでのヨーロッパの実践をともなう多様なデザイン運動との比較をおこなうことが望まれる。これは問題とは言い難いが、それによって研究の次の展望が開かれるであろう。

## 審査結果の要旨

### 1 本論文の構成

シェーカー教徒は、1776 アメリカに渡り、共同体を建設するなかで、必要な家具や建築をつくり、独自のデザインをおこなった。本研究は、これまでも注目され、言及されることは多かったが、体系的な研究は乏しいシェーカー教徒のデザイン、とくに家具デザインを主な研究対象として、その理念的な特質を「簡素」の概念として考察し、その造形の形成と発展について、「簡素」の概念への志向性を保持しながら、他方で、新しい技術の導入やシェーカー共同体を取り巻く外部社会からの影響のもとで、明らかにしている。

論文の構成は以下の通りである。

(目次)

序論 課題設定と方法

第1節 本研究の背景と目的

第2節 本研究の方法と構成

第I部 創成と限界 1776 – 1820

第1章 ビショップリックによる管轄とアンの言葉

第1節 共同体相互の連携とデザインの類似性

第2節 アンの言葉の内容と踏襲

第2章 装飾の抑制とその意味

第1節 伝統的な家具の複合的影響

第2節 伝統様式の残存

第II部 理想の実現 1821 – 1860

第1章 簡素の概念と理想像の完成

第1節 法と制度における簡素の概念

第2節 共同体の理想像

第2章 シェーカーのデザインの成立とその意味

第1節 典型の完成と不安定性

第2節 理想の意味

第III部 世俗化と多様化 1861 – 1876

第1章 外部社会との交易と共同体の世俗化

第1節 フィラデルフィア万国博覧会への出品

第2節 詩に見られる流行への関心

## 第2章 木工機械の導入によるデザインの変化

### 第1節 アンドリュース研究とリーマン研究の比較

### 第2節 木工機械の導入によるデザインの変化とその意味

## 終章 シェーカーのデザインの今日的意味

### 第1節 ウィットニー美術館における20世紀最初の展覧会

### 第2節 シェーカーのデザインと現代デザイン理論

## 結論

### 主要参考文献・図版出典一覧

### 資料1 年表

### 資料2 CG画像

## 2 本論文の概要

本研究の目的は以下の点に要約することができる。

- (1)「簡素」の概念というシェーカー・デザインに独自の考え方の特質を明らかにすること。
- (2)「簡素」を志向するシェーカー・デザインの造形の特質について、形成、発展、多様化という過程として明らかにし、その造形を変化させた諸要因について考察すること。
- (3)「簡素」の概念とそれに基づくシェーカー教徒のデザインの研究を通して、シェーカー・デザイン研究の今日的な意義について再検討すること。

これらの目的のために、初期の研究者であるエドワード・デミング・アンドリュースと最近の研究者であるティモシー・D・リーマンの研究をはじめ、先行研究を踏まえながら、文献と家具、家具に関する写真と図面を資料として研究をおこない、あわせて、シェーカーの詩(歌)や伝承等のテキストの解釈、実際の家具のレプリカ制作やCG・CADの制作も織り交ぜながら、研究をすすめた。

また、研究をまとめるにあたり、(1)共同体が拡大する時期、(2)制度や規範が完成して共同体の規模が最大となる時期、(3)共同体の規模が縮小していく時期に対応して、(1)初期の造形の形成、(2)造形の洗練と典型の完成、(3)造形の多様化という造形の特徴を捉える3つの時代区分をおこなっている。

## 第I部 創成と限界 1776 - 1820

第1章(ビショップリックによる管轄とアンの言葉)においては、最初の指導者であるアン・リーの言葉を手掛かりとして、「簡素」の概念の発生が尋ねられる。彼女の言葉には、デザインや様式についての言及はないが、生活の細部への注意という特徴がある。

また、シェーカーの行動規範が成文化される以前の造形様式の形成において、管区という制度を超えて往来する職人の果たす役割が指摘される。文献の端々から、職人と物資の

管区を超えた移動が追跡されている。

第2章(装飾の抑制とその意味)においては、当時、共同体の周辺にあったオランダ様式、ウィンザー様式(バニスターバックチェアー)、ニューイングランドの伝統様式のそれぞれが、初期の椅子の造形へ影響したことが、それぞれの様式の造形要素(細部)とシェーカーの椅子の造形要素(細部)を比較することで検証されている。

## 第Ⅱ部 理想の実現 1821 - 1860

第1章(簡素の概念と理想像の完成)においては、この時期に、シェーカーの行動規範と制度が成文化された『ミレニアル・ロウズ』と『ア・サマリー・ビュー・オブ・ザ・ミレニアル・チャーチ』等を資料として、シェーカー・デザインに最も特徴的な「簡素(simplicity)」の概念が考察される。「簡素」の概念が、類似する造形の概念('plainness', 'without ostentation', 'pure', 'wholly unmixed')と交換されること、さらにシェーカーの教義と結びつく12の概念('faith', 'hope', 'honesty', 'innocence', など)が同様な記述方法をとることが示される。たとえば、「簡素」は、「考え」、「言葉」、「仕事」という3項の関係によって記述されるのだが、これは他の概念が、「考え」、「言葉」、「仕事」あるいは「心」、「言葉」、「行ない」という3項の関係によって記述されるのと同型であり、12の概念の説明は互いに交差するように組み立てられている。したがって「簡素」の概念は単に形態を説明する概念ではなく、それら12の概念と同様、「考え」=〈内的行為〉、「言葉」=〈アイデアの表現〉、「仕事」=〈行為や結果〉の3項の関係で規定される概念であることが明らかにされている。

さらに、この12の概念以外に、共同体の行動規範にとって重要な概念として、男女等の「平等」の概念と建築におけるシンメトリーな空間構成との関係、そして、「清潔」の概念と家具使用と生活の関係について言及されている。

第2章(シェーカーのデザインの成立とその意味)においては、「軽量化」の観点から「簡素」な造形が考察される。椅子の軽量化は形態の簡素化よりも後に出現するのであるが、1800年から1880年にいたる椅子の軽量化の過程を追跡することにより、最終的には補強材や特別な継ぎ手を使った極度の軽量化による造形の洗練という様式への関心や造形の実験的な試みが考察されている。

## 第Ⅲ部 世俗化と多様化 1861 - 1876

第1章(外部社会との交易と共同体の世俗化)においては、南北戦争以後の共同体の縮小のなかで、外部社会からのシェーカー・デザインへの注目、反対に、家具販売やフィラデルフィア万博への参加という外部社会との交流の活性化をとおして、またこの時期のシェーカー教徒のジョージアン様式等の流行への関心を通して、シェーカー・デザインの

典型から逸脱する多様な造形の試みが指摘される。

第2章(木工機械の導入によるデザインの変化)においては、立て削り機、旋盤、形削り盤、中ぐり盤等の工作機の導入による造形の細部の形状の変化と装飾の発生や消滅等について追跡されている。工作機の導入により、単に装飾が減少するのではなく、一時的な装飾が発生の事例が提示され、これまでの先行研究に反例が示されている。

終章(シェーカーのデザインの今日的意味)においては、ウィットニー美術館をはじめ20世紀に開催されたシェーカー・デザインについての展覧会がサーベイされ、何に注目され、何に意義が見出されたかが整理されている。

また、シェーカー・デザインの「簡素」の概念とビクター・パパネックの「機能複合体」、そしてマックス・ビル「美的機能」の概念の比較をとおして、近代のデザイン理論の枠組みでシェーカー・デザインが捉えられる。この比較をとおして、簡素の概念を中核としたシェーカー・デザイン研究から今日のデザインへの意義が次のように示される。(1)簡素の概念に見るように、デザインは生活の仕方への啓蒙を基盤としている(2)簡素の概念は、思想や言葉、製品形態、機能などを貫く複合的な概念である(3)簡素さは環境形成の調和にとって有効である(4)デザインの可能性が抑制されることがない標準や規範のありかた。

最後に、シェーカー・デザイン研究の資料を今後の研究とデザインへ活用するために、制作した年表と家具に関するCAD・CGデータを資料として付している。

### 3 本論文の成果と問題点

本論文は、デザインの領域で紹介されることは多かったが、体系的に研究されることが少ないシェーカー教徒のデザインについて、「簡素」の概念と造形について典型的創成、発展、多様化という造形の変化を捉える観点から、そのデザインの特質を明らかにしたという点において独自の研究である。また、理論的そして実証的に展開された研究の努力が本論文で結実したといえることができる。

第Ⅱ部第1章の「簡素」の概念の考察、および、第Ⅲ部第2章の工作機械の導入の観点からの造形の典型的創成、発展、多様化という変化についての考察は、すでに論文として受理され、評価された研究であり、本研究の核をなしている。

この他にも、本論文の概要で記したとおり、第Ⅰ部第1章の職人が管区という制度を超えて共同体間を往来したことが果たした初期の造形の標準の形成への寄与、第Ⅱ部第2章の軽量化の視点からの簡素の概念にもとづく造形分析、第Ⅲ部第1章の外部社会との交流による造形の多様化のなかには、これまでになかった新しい問題の指摘や仮説の提示、

独自の発見や考察が含まれている。

以上の点において、本論文は、著者が企てた研究目的を達成しているといえることができる。

しかしながら、問題点もある。第一に、先行研究の乏しい研究テーマなので、関連する分野の文献を広く参照するのはよいが、そのために、先行研究と資料の整理が十分になされたとはいえない点である。たとえば「行動規範」や「制度」など宗教、倫理、生活様式、社会という異なる複数の分野に根ざす分析概念が十分に規定されていると言いつい難い点である。さらに、やや唐突とも思われる程、参照と引用の範囲を拡げている箇所については、もう少し説明を加えることが望まれる。

第二に、デザインの研究として、シェーカー・デザインと同時代のラスキンやグリーンウの思想との比較についてはもう少し詳述することが期待される。また、シェーカー・デザインを近代デザインに位置付けるときに、本研究では機能概念を批判的に拡張し、見直しているヴィクター・パパネックとマックス・ビルのデザイン思想との比較がなされているが、本論文で若干触れているサリヴァンをはじめ、20世紀半ばまでのアメリカとヨーロッパの実践をともなう多様なデザイン運動との比較をおこなうことにより、これは必ずしも問題とはいえないが、研究の次の展望が開かれることになるであろう。

上記の問題あるいは、課題は、筆者も認識しており、本論文の成果を損なうものではないと考えられる。研究に対する真摯な努力と、広い範囲にわたる資料調査に支えられて、独自の問題提示や検証をおこなった本論文は、筆者の優れたデザイン研究の能力を示していると認めることができる。今後、次の段階に向けて研究を深化させ、発展させることが期待される。

#### 4 最終試験と結論

平成19年1月30日、公聴会終了後に、論文提出者石川義宗氏に、最終試験をおこなった。最終試験は、提出された論文「シェーカー教徒の家具および建築デザインの研究：簡素の概念と造形の形成と発展」について、審査委員が、逐次、問題点を指摘し、説明を求める形式をとった。質問に対して、石川義宗氏は十分な説明を与えた。

審査員一同は、(1) 提出された書類が規定を充たすことを確認し、(2) 3年間の授業単位を修得し、専門学術(デザイン)に関する学力を有すると認定し、(3) この博士論文がシェーカーのデザインに光を当て、新たなデザインのテーマを開拓するものとして独自性があり、デザイン領域の研究に寄与するものであると認め、よって、石川義宗氏に武蔵野美術大学の博士(造形)の学位を授与するにふさわしいと判断する。